

中学校社会科における地歴連携の授業開発

－日本遺産「鮭の聖地」の地域調査の教材化について－

Class Development of Cooperation of Geography and History in Junior High School Social Studies

菊 地 達 夫

KIKUCHI Tatsuo

I はじめに

社会科・地理歴史科では、地歴連携が叫ばれて久しい。2006年秋に生じた高等学校における世界史未履修問題以降、地理では、歴史的背景、歴史では、地理的条件について学習指導要領で触れ、双方の関連性を強調している。具体的には、地理学習における時間軸、歴史学習における空間軸の関係性の確認である。地理学・歴史学は、時間軸、空間軸の双方を活用し、重点の置き方に違いがある。他方、地理教育・歴史教育では、専門性が高まるにつれ、双方の関連性を希薄にした感はぬぐえない。

2020年開始の新小学校学習指導要領社会編では、各単元内容において、地理的内容、歴史的内容、公民的内容に区分した。結果、小中高を通じて、地理、歴史、公民の系統化は、明確となった。一方、内容・分野が明確に区分されたことで、互いの関連性を意識しにくくなった可能性はある。

自明の事であるが、小中学校の社会科は、地理・歴史・公民の総合性を有する。ゆえに、2021年の中学校、2022年の高等学校における新学習指導要領の開始を見据え、地歴連携の授業開発は、一定の意義をもつものと考えた。

そこで本稿は、中学校社会科における地歴連携の授業開発を目的とする。具体的には、地理・歴史的分野の地域調査に着目し、その教材として日本遺産「鮭の聖地」を取り上げる。また、地歴連携の視点として、地理からのアプローチに重点を置く。加え、日本遺産「鮭の聖地」を事例として、日本遺産の地歴教材の有用性を構築する。

さて、地理からのアプローチとする地歴連携に関する先行研究は、いくつかある。例えば、山口（2020）では、近年発表された地歴連携に関する地理教育研究論文等を整理し、地理教育からの地歴連携の取り上げ方として、4類型に分け示した。具体的には、類型Aは現在の地域の中に見られる歴史的要素、歴史的背景を取り上げる方法、類型Bは現在に至るまでの過去の歴史的要素・歴史的背景・歴史的条件を通史的、略史的、断続史的、現在において取り上げる方法、類型Cは過去のある時点、あるいは過去のある期間において地理的・歴史的要素を取り上げる方法、類型Dは歴史の地理的条件、あるいは歴史の地理的解釈について取り上

げる方法である。また、歴史的要素として、政治的地理的内容、人物的内容、時間性の導入を示唆している。さらに、カリキュラム・マネジメントとして、地歴連携単位20時間を設定し、年間で4テーマ程度、各5時間の配分を提案している。その時間は、地理的・歴史的分野からそれぞれ5時間、「総合的な学習の時間」から10時間の割愛とした。中学校社会科の場合、地歴連携は、総合化の1つの方法として重要性をもつことも指摘している。

青柳尚郎他（2020）では、地理的思考力を育む地歴統合型単元の開発を行い、その結果について考察した。地歴統合型単元の開発の理由として、地歴融合型の場合、地理・歴史の両者から関連付けた本質的理解が、達成されていない点を課題とした。開発授業は、関東地方の諸地域学習で行い、事前後の評価課題の内容をもとに検証した。結果、「外国人労働者」課題では、本質的理解は限定的であった。他方、「耕作放棄地」課題では、地理的条件と歴史的背景の関連付けはあり、本質的理解について一定の効果があったことを報告している。その背景として、身近な地域にみられる類似課題であった点、過疎地域の学習を終えていた点を挙げている。

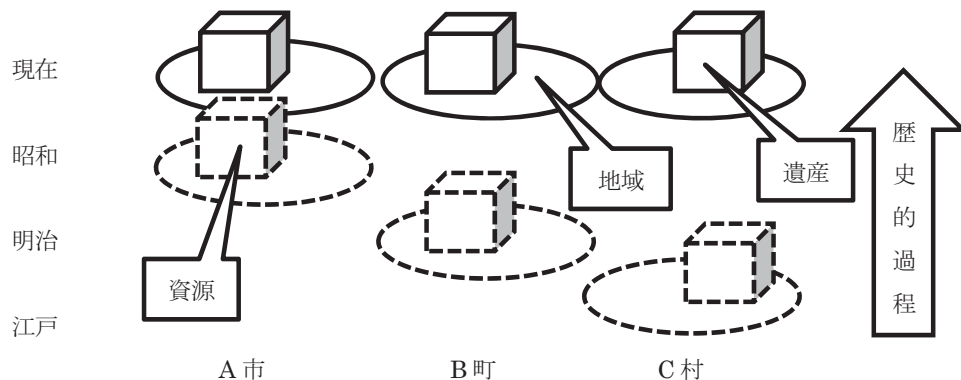
以上、地歴連携の授業の在り方として、地理的分野、歴史的分野、総合的な学習の時間の時間数等を調整して行う融合型（連携）、統合型の導入を示唆している。これらの導入には、学校全体、教科・学年全体といった共通理解が前提となる。地歴連携授業の質的な向上を考えた場合、融合型や統合型は理想的ではあるものの、その実現には関係者の共通理解や時間調整を必要とする。そのため、現行の学習内容・展開の範囲のままで実現可能な授業開発を優先する。

II 授業開発の視点・考え方

1 日本遺産の教材化の意義

日本遺産は、2015年度から2020年度までの6年間において、全国各地104件を認定した。日本遺産の認定数は、当初100件程度としており、2020年度分の認定発表を行い、目標値を超えたことにより終えた。

従来の文化財認定と異なる点は、点としての文化財を面として捉えようとする点にある。



第1図 日本遺産（シリアル型）の構成文化財の構造

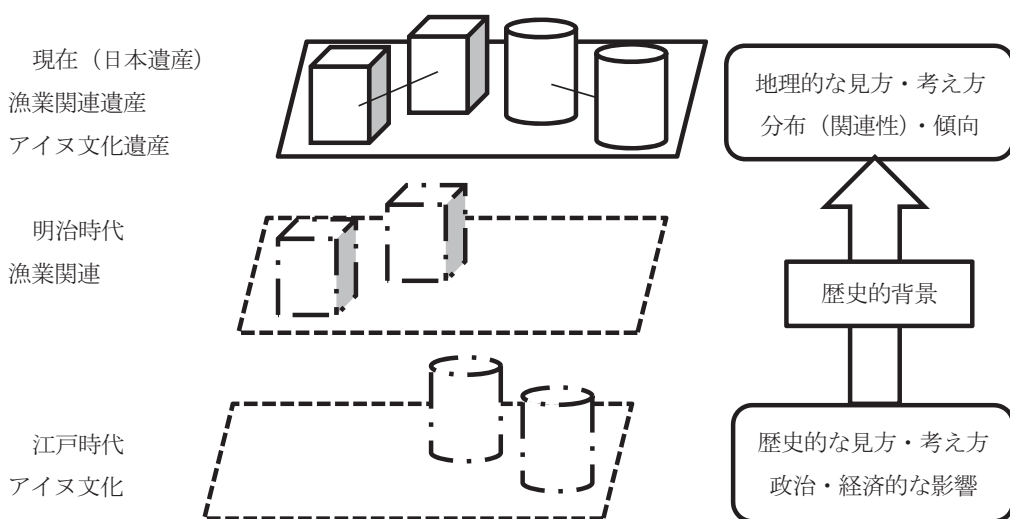
例えば、異なる地域（A市、B町、C村）や時代（昭和、明治、江戸）に生じた資源を結び付け、一括りの関連遺産として位置付けるものである。すなわち、1つのストーリーの下、関係する構成文化財を結び付けようとする試みである。とりわけ、日本遺産の内、シリアル型が、これに該当する。異なる地域の結び付きは、地理教材、異なる時代の結び付きは歴史教材として取り上げることができる。これらの特色を合わせもつ日本遺産は、地歴連携教材として適する。

2 地理・歴史的な見方・考え方を働かせる視点

前節において、日本遺産が、なぜ地歴連携の教材化に適するのか触れた。ここでは、地歴連携の授業開発を目指すにあたり、日本遺産を用いて、どのような地理的・歴史的な見方・考え方を働かせるのか示す。

構成文化財は、地域産業や生活・文化などに関連する地域資源が多い。それらは、中心的な文化財（例：漁業関連／長方形）と間接的な文化財（例：アイヌ文化／円錐）に分けることができる。結果、区分による分布を見極め、空間的な傾向を浮き彫りとする。その傾向をみて、地理的近接性や偏在が見えてくるかもしれない。これらは、地理的な見方・考え方を働かせる視点となる。

次に、いくつかの歴史的なステージ（例：明治・江戸時代）に分け、各ステージの中で構成文化財を結び付け、時間的な違いを浮き彫りとする。結果、その時期における政治・経済的な影響が見えてくるかもしれない。これらは、歴史的な見方・考え方を働かせる視点となる。



第2図 日本遺産を教材活用する地理・歴史的な見方・考え方の視点（構造図）

Ⅲ 授業開発の構想

1 関係学習指導要領の内容

本節では、身近な地域調査の学習内容について、地理的分野と歴史的分野で、どのように実施するよう示しているか、確認する。

地理的分野の場合、(1) 地域調査の手法と(4) 地域の在り方に分けた。(1)が、身近な地域調査の方法について学び、(4)で地理的な課題を設定して、地域調査を実施するよう示している。とりわけ、(4)では、地理的な課題を設定し、その状況や政策について理解し、それらを考察するようになっている。その過程では、地域の結び付き、地域の変容、持続可能性に着目しながら、多面的・多角的に考察することを指摘している。

調査対象地域は、学校所在地周辺を基礎としながら、その他地域を含めることを可能としている。また、歴史的分野との関連では、歴史的背景について、現在の地域的特色を捉える程度に留めることを強調している。

歴史的分野の場合、身近な地域で受け継がれてきた伝統や文化を取り上げ、具体的な歴史的事象に触れながら、地域の歴史を年表化するよう示している。その過程では、比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながりなどに着目しながら、地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現することを指摘している。

調査対象地域は、学校所在地周辺を基礎としながら、地域の特性に応じて、より広い範囲を設定できるとしている。また、地理的分野との関連では、地図を用いて空間的な認識を養いながら、「博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力を考慮」(内容の取扱い)して、身近な地域における具体的な歴史に関わる事象からその時代の様子を考察できるようにすることを例示している。

以上から、地域調査の主題には、地理的な課題(地理的分野)や伝統文化(歴史的分野)といった違いがある。他方、地域規模には、広域的な可能性を含み、地歴連携の視点に触れている点には共通性がある。

第1表 中学校社会科地理的分野における地域調査に関する学習指導要領の内容

<p>(4) 地域の在り方 空間的相互依存作用や地域などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 次のような知識を身に付けること。</p> <p>(ア) 地域の実態や課題解決のための取組を理解すること。</p> <p>(イ) 地域的な課題の解決に向けて考察、構想したことを適切に説明、議論しまとめる手法について理解すること。</p> <p>イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。</p> <p>(ア) 地域の在り方を、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性などに着目し、そこで見られる地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。</p>

<p>エ (4)については、次のとおり取り扱うものとする。</p> <p>(ア) 取り上げる地域や課題については、各学校において具体的な地域の在り方を考察できるような、適切な規模の地域や適切な課題を取り上げること。</p> <p>(イ) 学習の効果を高めることができる場合には、内容のCの(1)の学習や、Cの(3)の中の学校所在地を含む地域の学習と結び付けて扱うことができること。</p> <p>(ウ) 考察、構想、表現する際には、学校対象の地域と類似の課題が見られる他の地域と比較したり、関連付たりするなど、具体的に学習を進めること。</p> <p>(エ) 観察や調査の結果をまとめる際には、地図や諸資料を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えたり論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。</p>
<p>地理的な課題については、「地域の結びつき」、「地域の変容」、自然環境と人々の生活との関わりが影響し合う「持続可能性」などに着目して、課題を設定し、考察することが考えられる。</p> <p>歴史的背景の「背景」とは、地理的分野の学習は現在の地域的特色を捉えることに主眼があることを意味しており、「歴史的背景」は現代の地域的特色を捉える上で必要な範囲において取り上げるようにする。</p>

資料) 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編。

第2表 中学校社会科歴史的分野における地域調査に関する学習指導要領の内容

<p>(2) 身近な地域の歴史</p> <p>課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 次のような知識を身に付けること。</p> <p>(ア) 自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、地域の歴史について調べたり、収集した情報を年表などにまとめたりするなどの技能を身に付けること。</p> <p>イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。</p> <p>(ア) 比較や関連、時代的背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながりなどに着目して、地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること。</p>
<p>イ (2)については、内容のB以下の学習と関わらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取り扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力を考慮すること。</p>
<p>身近な地域とは、生徒の居住地域や学校の所在地域を中心に、生徒自身による調べる活動が可能な、生徒にとって身近に感じることができる範囲であるが、それぞれの地域の歴史的な特性に応じて、より広い範囲を含む場合もある。</p> <p>アの(ア)について、例えば、地域に残る文化財や、地域の発展に尽くした人物の業績とそれに関わる出来事を取り上げ、地図を用いて空間的な認識を養いながら、「博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力を考慮」(内容の取扱い)して、身近な地域における具体的な歴史に関わる事象からその時代の様子を考察できるようにする学習などが考えられる。</p> <p>指導計画の作成に当たっては、「地理的分野との連携」に配慮する必要がある。</p>

資料) 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編。

2 日本遺産「鮭の聖地」の概要

日本遺産「鮭の聖地」とは、北海道根室管内の標津町、根室市、別海町、羅臼町の4市町によって申請した『鮭の聖地』の物語～根室海峡1万年の道程～が2020年6月に認定されたものである。

根室海峡沿岸の鮭漁は、縄文時代、統縄文時代、擦文時代を経て、道東のオホーツク文化に

触れ、アイヌ文化へ受け継がれてとされている。さらに、江戸時代、根室海峡沿岸に鮭の漁場を開設し、交易を拡大した松前藩によるアイヌ民族への圧政、幕末にロシアの南下政策への警戒に当たった会津藩とアイヌ民族との関わり、明治期の鮭の漁獲減に伴う漁業の多様化、内陸での酪農の発展、加工技術の向上による山漬けや鮭飯寿司の食文化の確立といった長期間の関連内容を含む。これら鮭を中心とした文化・産業の形成過程に関する構成文化財（未指定を含む）が、31件を数える。

地理学習では、鮭漁を介した他地域の人々との関係性（例：松前藩とアイヌ民族、会津藩とロシア）、他の関連産業の形成（例：酪農、鉄道）、歴史学習では、時代を超えた鮭漁の継承、鮭漁を通じた地域文化（例：食文化）の形成といった点多面的・多角的な考察ができる。

例えば、地理では、産業を拠点とした人または物の移動の広がり、歴史では、長期にわたる生業形態の維持・変化、技術革新に伴う鮭の活用の広がりといった理解ができる。これらは、空間軸と時間軸の双方の視点を含むものであり、地歴教材としても有益となる。

第3表 日本遺産「鮭の聖地」の構成文化財（未指定を含む）

<p>【世界に開かれた野付半島と人々を魅了し続けた鮭】</p> <p>1 野付半島（別海町・標津町）○●</p> <p>2 松法川北岸遺跡出土品（羅臼町）</p> <p>3 根室半島のオホーツク文化出土品（根室市）○</p> <p>4 野付通行屋遺跡（別海町）○</p> <p>5 鮭とばを干す風景（1市3町）○</p> <p>6 山漬けの製法（1市3町）○</p> <p>7 鮭飯寿司の文化（1市3町）○</p>
<p>【鮭に支えられた1万年】</p> <p>8 標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡（標津町）</p> <p>9 根室海峡沿岸の鮭・鱒遡上河川（1市3町）○</p> <p>10 根室半島チャン跡群（根室市）</p> <p>11 西月ヶ岡遺跡（根室市）</p> <p>12 タブ山チャン跡（標津町）</p> <p>13 タチニウス北岸チャン跡（羅臼町）○</p>
<p>【幕末・会津藩土が育てた産業の灯火】</p> <p>14 標津神社とその奉納品（標津町）</p> <p>15 金刀比羅神社（根室市）○</p> <p>16 「我羅斯船之図」「ワシレイラフロウ之図」（根室市）</p> <p>17 会津藩土の墓（標津町）</p> <p>18 加賀家文書（別海町）</p> <p>19 旧開拓使別海缶詰所（別海町）</p> <p>20 碓氷勝三郎商店の酒蔵（根室市）○</p> <p>21 根室海峡沿岸の缶詰ラベル（根室市）○</p> <p>22 瑠瑠瓊獅子神楽（根室市）</p>
<p>【鮭の物語は大地へと続く】</p> <p>23 野付湾の打瀬網漁（別海町）○●</p> <p>24 根室の昆布漁（根室市）○</p> <p>25 海辺の牛舎跡（標津町）○</p> <p>26 旧奥行白駅通所（別海町）</p>

- | | |
|----|-------------------------|
| 27 | 旧別海村宮軌道風蓮線奥行臼停留所（別海町）● |
| 28 | 標津線関連資産群（別海町，標津町） |
| 29 | 根釧パイロットファーム関連文化財群（別海町）○ |
| 30 | 根釧台地の酪農建造物群（別海町，標津町）○ |
| 31 | 根釧台地の格子状防風林（別海町，標津町）● |

資料) 2020年8月29日付北海道新聞記事。

注) ○は未指定。●は北海道遺産選定。

3 授業開発の具体

本節では、日本遺産「鮭の聖地」を題材として、関係資料を用いての地理・歴史的な地域調査の授業構想を述べる。地理的分野の地域調査は、最終単元の学習、歴史的分野の地域調査は、最初単元の学習となっている。ゆえに、歴史的分野から地理的分野への学習の接続を想定した。

1) 歴史的分野の場合

歴史的分野の地域調査（本単元）の目的は、日本遺産「鮭の聖地」を活用して、幕末と北海道開拓に関する構成文化財を取り上げ、政治・経済的背景を理解できる、である。導入部では、31件の構成文化財が、どのような時間軸の範囲にあるのか、押さえる段階である。時間的な範囲は、縄文時代から昭和時代までの約1万年におよぶ長期間である。ある程度、時代による偏りがあるものの、適度に点在している。

展開部では、幕末・北海道開拓の時期に焦点をあて、関連する構成文化財を手がかりに、政治・経済的背景を押さえる段階である。まず、幕末・北海道開拓に関する構成文化財を抽出・整理させる。幕末の場合、「野付通行屋跡遺跡（別海町）」や「会津藩士の墓（標津町）」などを取り上げることができる。北海道開拓の場合、「旧開拓使別海缶詰所（別海町）」や「根室海峡沿岸の缶詰ラベル（根室市）」などを取り上げることができる。次に、幕末の政治・経済的な状況、北海道開拓の方向性について調べる。幕末では、和人による鮭漁の北上、ロシア人によるラッコ漁（ラッコの毛皮）の南下によって、接触機会が増えてきた。そのため、会津藩士に道東地域における国境警備を担わせたことに気付かせる。北海道開拓では、開拓使の設置のもと、産業基盤の形成を図った。そのため、道内各地において、官営工場の立地がみられた。続いて、関連構成文化財は、幕末・北海道開拓において、どのような役割・意味をもつのか考察させる。会津藩は、現在の福島県に位置する。なぜ、会津藩士の墓が、この地にあるのか、国境警備の関連から、その理由に気付かせる。缶詰工場は、対岸となる国後島にも立地した。また、多様な缶詰のラベルが残ることから、多様な産業基盤（水産業や酪農業）の形成を目指していたことを気付かせる。

終末部は、地域調査の成果をふまえ、北海道地域の歴史の特徴を押さえる段階である。北海道（蝦夷地）が、中央政府（江戸幕府）に組み入れられる過程で、本州方面とは異なる歴史的事実が展開されていたことに気付かせる。

第4表 歴史的分野における地域調査の内容

【本単元の目的】 日本遺産「鮭の聖地」を活用して、幕末と北海道開拓に関する構成文化財を取り上げ、政治・経済的な背景を理解できる。	
	学習課題
【導入部】 課題設定	日本遺産「鮭の聖地」の構成文化財は、どのような時間軸の範囲にあるものか、調べてみよう。
【展開部】 課題探究 1 事前調査 仮説の設定 2 本調査 3 整理・分析	幕末・北海道開拓に関する構成文化財を抽出・整理してみよう。 北海道に関連する幕末の政治・経済的な状況を調べてみよう。 北海道開拓の政治・経済的な方向性を調べてみよう。 幕末・北海道開拓に関する構成文化財は、どのような役割・意味があったのか、考察してみよう。
【終末部】 課題解決	調べた結果をもとに北海道の歴史（幕末から明治時代にかけて）は、どのような特徴を有するのか文章化してみよう。

2) 地理的分野の場合

地理的分野の地域調査（本単元）の目的は、日本遺産「鮭の聖地」を活用して、構成文化財の分布傾向と関係性を調べ、地域的特色を理解できる、である。

導入部は、各地に点在する日本遺産が、なぜ、活用重視なのか、その理由を調べ理解する段階である。日本遺産は、104件あるものの、その他に認定されなかったものがある。このように各地において、短期間に日本遺産へ申請する状況は、希少な地域資源の評価を受けたいことはもちろんであるが、その後の活用も重視している。日本遺産の活用では、地域の魅力を伝えるため、人材育成や環境整備といったまちづくりの方向性を示している。

展開部は、日本遺産「鮭の聖地」を取り上げ、構成文化財の分布傾向や関係性を理解する段階である。まず、日本遺産「鮭の聖地」が、どのような点に評価を受けたのか、調べる。具体的には、鮭漁を中心とした長期間の継承と、地域産業や文化の形成の価値に気付かせる。次に、構成文化財は、4市町に分布するが、どのような地理的傾向があるのか、空間的に把握させる。ある自治体に偏在しているのか、地形的な特色はあるのか、気付くことができる。続いて、関連構成文化財は、地域産業や文化の形成に、どのような役割・意味があるのか、思考判断させる。例えば、海辺の牛舎跡は、どのような意味があるか。明治時期以降、鮭の漁獲量が減少する中、半漁半農の形態をとることで、生計を補完する役割があった。牛舎跡は、その名残の痕跡である。

終末部は、地域調査の結果をもとに、日本遺産「鮭の聖地」が、どのような地域的特色を有するのか、持続的なまちづくりを構想する段階である。まず、構成文化財の分布傾向と関連性から、日本遺産「鮭の聖地」は、どのような地域的特色があるか理解させる。次に、歴史的分野の地域調査の成果をふまえ、どのような持続的なまちづくりができるか、構想させる。構想

後は、意見交換をしながら、知識の再構成を行い、持続的なまちづくりについてまとめさせる。

第5表 地理的分野における地域調査の内容

【本単元の目的】 日本遺産「鮭の聖地」を活用して、構成文化財の分布傾向と関係性を調べ、地域的特色を理解できる。	
	学習課題
【導入部】 課題設定	各地に点在する日本遺産は、なぜ、活用重視なのか、その理由を調べてみよう。
【展開部】 課題探究 1 事前調査 仮説の設定 2 本調査 3 整理・分析	日本遺産「鮭の聖地」は、どのような点が評価されたのだろうか調べてみよう。 日本遺産「鮭の聖地」の構成文化財は、どのような分布傾向があるか調べてみよう。 構成文化財は、どのような地域文化・産業の関係性があるか調べてみよう。
【終末部】 課題解決	調べた結果をもとに、日本遺産「鮭の聖地」は、どのような地域的特色を有するのか文章化してみよう。歴史的分野の地域調査の成果も含め、日本遺産「鮭の聖地」の活用・発展の可能性を構想しよう。

IV 授業開発の意義

本章では、授業開発の内容をふまえ、どのような地歴連携の意義があるのか、加え、日本遺産の教材化の可能性・汎用性を述べる。

1つは、同一教材（日本遺産「鮭の聖地」）を用いて地域調査を行い、地理的・歴史的な見方・考え方を実現できた点にある。また、歴史的分野の学習内容から地理的分野の学習内容へ繋ぎ、具体的な橋渡しができた。

2つは、1つの教材または学習内容から、それぞれ別な切り口で迫り、地理的認識や歴史的認識を得ることで理解の深化ができる点にある。これらは、社会科の総合性を具体化するものであり、多面的・多角的な考察にも貢献できるものである。

すでに述べたように、日本遺産は、全国各地に104件を数える。北海道地方5件、東北地方8件、関東地方12件、中部地方18件、近畿地方28件、中国地方19件、四国地方5件、九州地方13件あり、他に複数の地方にまたがるものがある。とりわけ、シリアル型の日本遺産は、地域連携による一体化（パッケージ）したものであり、広範囲におよぶものもある。また、時間軸の範囲は、一定の時期のものから長期にまたがるものもある。

日本遺産は、身近な地域調査（地理・歴史）の教材化として汎用性がある。また、地域調査の地理的な課題では、持続可能性を求めている。よって、まちづくりの観点から持続可能な教材としても適する。

V おわりに

以上、本稿は、中学校社会科における地歴連携の授業開発を目的としたものであった。その教材として、日本遺産「鮭の聖地」を取り上げ、地域調査の教材として、歴史的分野と地理的分野の構想を示した。また、地歴連携の意義と日本遺産の教材化の汎用性を示唆した。

本稿の成果は、2点ある。1つは、全国各地に点在する日本遺産を地歴連携の教材化として示すことができた点である。単なる日本遺産の教材化ではなく、地理学習、歴史学習の双方の授業構想として示すことができた。

2つは、地域調査の地歴連携の教材化として、歴史的分野から地理的分野へ具体的な接続を示すことができた点である。中学校社会科の地理・歴史的分野は、同時進行的な展開が多く、身近な地域の歴史（歴史的分野）は、社会科の導入の役割として、身近な地域の調査（地理的分野）は、社会科の中間的なまとめの役割として位置付けことができる。

今後は、地理・歴史単元における各授業の具体化（発問や指示、資料提示の場面など）や他の日本遺産における地歴連携の授業開発を継続し、教材化実現に向けた可能性を広げていくことである。

（付記）

本稿の内容は、2020年全国地理教育学会全国大会一般研究発表（紙面）で発表したものを骨子として発展させたものである。

文 献

青柳尚郎・佐々木暢・石橋優美・鈴木豪・藤村宣之（2020）：生徒の地理的思考を育む地歴統合型単元の開発と実証的検討－中学校地理的分野「関東地方」を題材として－，日本社会科教育学会全国大会発表論集第16号，pp.108-109.

小澤裕行（2020）：中学校社会科における地歴連携授業の理論化の試みと具体的実践，地理教育研究第27号，pp.72-74.

菊地達夫（2020）：文化遺産を活用した地理授業の系統化，地理教育研究第26号，pp.42-46.

菊地達夫（2020）：日本遺産「炭鉄港」を題材とした小学校社会科の授業開発，地理教育研究第27号，pp.51-56.

山口幸男（2020）：地歴連携の原理と方法，地理教育研究第27号，pp.77-81.